

余山貝塚出土土偶群の構成

吉岡 卓真

はじめに

明治期より数々の発掘が行われ、茨城県に所在する椎塚・福田の両貝塚とならび学界に広く知られることとなった余山貝塚の土偶は、多様な土偶群で構成されている。本論では大阪歴史博物館収蔵の土偶の時期やその特徴を概観し、次にこれまでに採集・報告された資料を合わせて、余山貝塚における土偶の出土期間及び保有状況の特徴について触れる。

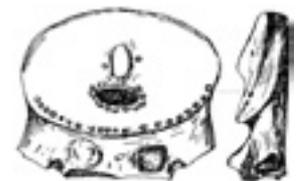
1. 大阪歴史博物館収蔵資料

本資料群は、後期中葉から晩期前葉を中心とする資料で構成される。その中で、22 ページ第 8 図 1 は従来の山形土偶とは顔面部や体部の装飾表現が大きく異なる。体部に見られる装飾表現の類例として、東北地方の後期中葉の時期には竹管状工具で正中線を描く資料があり、その関連性が注目される。ただし、東北地方に見られる土偶の顔面部には V 字をなす眉状隆帯が存在し、頭頂部には捻転した隆帯を伴う点など、余山例には見られない特徴もある。したがって 1 に関しては一部、東北地方との関連を示す特徴を認めつつ、すべてを東北地方の要素として説明できない点もあり、その成立過程の解明には検討の余地がある。なお類例としては千葉県佐原市の大倉南貝塚例が挙げられる（第 1 図）。本資料も無文部への入念なミガキと竹管状工具による装飾を基本とし、眉状の隆帯を伴わず、目や口の周囲に施された刺突はいずれも竹管状工具を使用する点など、余山例と非常によく似た特徴を示す〔西村 1984〕。

次にミミズク土偶であるが、各部位で時期差を見出すことができる（23・24 ページ第 9・10 図）。すなわち顔面部では山形土偶に近い横楕円形の目を持つ第 9 図 7 から、円形の目の表現に変化する同図 9 があり、胴部では正中線の表現を伴う第 10 図 1 からそれを消失する同図 2、そして脚部では内股に稜を形成していた同図 1 から稜が消失し平板化する同図 3・4 等、ミミズク土偶の変遷を考える上で興味深い資料が多く見られる。

2. 余山貝塚出土資料概観

さて、大阪歴史博物館収蔵資料 21 点は、余山貝塚の後期中葉から晩期前葉の土偶群の構成を理解するうえで重要な役割を果たすが、遺跡全体の保有状況を理解する上ではその一部にすぎない。ここでは大阪歴史博物館収蔵資料と前後する時期に採集された資料を中心に、余山貝塚における土偶の保有状況を概観する（第 2 図）。後期中葉山形土偶の時期には、1 のような、顔面部に眉状の隆帯を伴い、粘土の貼り付けによる目の表現と後頭部に円形の瘤を伴う典型的な山形土偶を確認できる。そして 2 は顔面部を沈線で充填しており、後出する特徴を示す。この顔面への沈線の充填は、後期後葉のミミズク土偶の時期に刺突を伴う沈線に変容する。また注目すべきは 3 である。本



第 1 図 大倉南貝塚出土土偶



(辰馬考古資料館所蔵)

第2図 余山貝塚出土土偶

(縮尺不同)

資料は1と同じ眉状の隆帯を伴うが、作りは中空構造であり、類例は椎塚貝塚や福田貝塚で確認されているものの、その数は少ない^{〔註1〕}。22ページ第8図1とともに山形土偶の成立過程やその製作技術の多様性を示す資料として重要である。

後期後葉の時期にも注目すべき資料が多く存在する。4は有髯土偶として当時の学界で周知された資料で、全面赤彩された中空構造の頭部片である〔坪井1908〕。後頭部に描かれた重層する弧線文や接点に貼付される粘土瘤などの特徴は、東北地方に分布する注口土器をはじめとする器種に多く見られる文様要素であり興味深い^{〔註2〕}。

また、山形土偶からミミズク土偶への変遷過程をよく示す資料も存在する。5は後頭部に瘤を伴い、目は押捺を伴う横長の粘土瘤で表現されるなど山形土偶の特徴を残す一方で、顔面の輪郭部分を隆帯で囲んでおり、ミミズク土偶に近い要素も見られる。

続く後期後葉ミミズク土偶の時期には6④や7などが、23ページ第9図7と共に古手のミミズク土偶の一群を構成する。6④と7の両者は、顔面部を弧線文で充填し、腕部には起伏のある帯縄文を伴う。また背面の首の付根には縄文を伴う横長の瘤を貼り付けるなど多くの共通点を持つ。その一方で6④の耳の表現は、正面からは確認できない背面側に、穿孔を伴う半月状の瘤で表現され、7は正面から耳の表現が確認され頭頂部は平坦な作りをしており、それぞれ特徴ある頭部形態を示す。ちなみに両者に見られる耳の貼り付け位置や頭頂部形態の類例は、周辺地域で複数例確認できる。また6④は後頭部に山形土偶に見られた円形の突起を有するが、7では後頭部に突起を持たず、刺突列沈線による円文が描かれる。この7における後頭部の平板化は時期差ではなく山形土偶の時期に見られた系統差をそのまま反映している可能性が高い。つまり椎塚貝塚で見られた山形土偶の二者は、前時期の様相をよく示す〔吉岡2012〕。こうした6④や7にそれぞれ見られた特徴的な頭部形態は、単一系統を前提には理解できない要素であり、遺跡内には同時期に複数系列の土偶群が保有されていたことを示す。次にこれらに後続する資料として8があり、目や口の周囲に刺突列沈線を施すが、顔面部への充填は低調になる。そして6⑤や9では顔面への刺突列沈線の充填がさらに低調になり、目や口の周囲と頬部に限定されるとともに、新たに目の上に刻み装飾を伴うようになる。さらに10になるとそれまで穿孔による耳の表現だったものが目や口と同様のボタン状の貼り付けに変化する。その後もミミズク土偶は余山貝塚において連綿と変遷を遂げる。晩期前葉の資料として、11があり、顔面部の刺突列沈線は消失し、口部は円形をなすボタン状の貼り付けから「へ」の字状隆帯の貼付に変化する。

そして晩期中葉には、前浦式期に伴うであろう資料が出土する（12）。本資料は板状の作りをなす胴部片で、胸には逆「U」字状の乳房表現を伴う。また時期的には前後するが中空のミミズク土偶の頭部も採集されており、晩期中葉には様々な文様系列の土偶が複数併存する状況が観察される。

3. 余山貝塚出土土偶からみた今後の課題

余山貝塚からは、大阪歴史博物館収蔵資料および第2図をはじめ、これまでに後期中葉から晩期中葉にいたる多くの土偶が採集されてきた。本論では、それらの資料の中で、当該地域における土偶研究の今後の課題として位置づくであろう資料について触れる。後期中葉の時期においては、22ページ第8図1に代表される土偶があげられる。本資料は近年の研究により「山形土偶直前段階」の土偶として位置づけられた資料の一部である〔上野ほか2011〕。その影響として、東北地方の土偶の介在が指摘されている。確かに胴部に施された竹管状工具による正中線の表現等、一部にその影響は確

認できるものの、顔面部に眉状隆帯を伴わず、目や口の周囲を竹管状工具による押捺で表現する点など、説明のつかない部分もある。また、至近の遺跡より出土した大倉南貝塚の資料は、顔面表現が非常によく似ているものの、首のない作りであり、その表現形態には多様性がみられる（第1図）。おそらくこうした要因を一方的に東北地方からの影響として理解するべきではなく、むしろ後期前葉の時期に関東内部でみられた複数系列の土偶群の一部が、東北地方の影響を受容し、その後関東地方内部で変容を遂げたことも想定すべきであろう。そしてこれらの土偶が、上野が指摘した「山形土偶直前段階」という一時期に収まり、以後の山形土偶の系列には登場しないのか、その時間幅も含めた検討が今後の課題である。

また、後期後葉の時期に目を向けるならば、当該期の重層的な土偶保有状況の一端を窺うことのできる資料が存在する。それは第2図5の存在である。本資料は頭頂部に2つの小突起を伴う特徴ある頭部形状をなす。そして頭頂部や後頭部に施された沈線や刺突が粗雑な施文である点が着目される。こうした特徴ある装飾施文の要因としては、本資料のサイズが関係していよう。本資料はサイズが小型であり、それに伴い文様施文や装飾の一部が簡略化されたものと思われる。しかしながらこうした頭頂部が双頭をなす小型資料の存在は、この余山例に限定されるわけではなく、ミミズク土偶の分布する各地で同様な頭部形態を有する小型サイズの資料が散見される。そしてその変遷も、目の表現が横長の粘土貼り付けをなす5から、円形のボタン状の貼り付けに変化したものや、穿孔による耳部表現を伴うもの、耳部が目や口と同様のボタン状の貼り付けに変化するものまで、小型の作りにもかわらず、通常サイズの土偶と連動した変化を見ることができる。

後期中葉の山形土偶の時期には、サイズを基本に文様装飾の異なる土偶群が同一遺跡、地域内で共存する状況がすでに指摘されている〔阿部2007〕。こうした保有形態が当該期にも引き続き存在している可能性があり、当該期における土偶保有状況の解明が今後の課題となろう。

【註】

- (1) 本資料は現在、南山大学人類学博物館に収蔵されていることを確認した。
- (2) 辰馬考古資料館には同様の文様装飾を有する壺形土器があり、当該期には東北地方の情報が土偶のみならず土器を含め、一連の道具構成として余山貝塚に流入していた可能性が高い。

【参考文献】

- 阿部芳郎 2007 「山形土偶の型式と地域社会 - 土偶の型式と技術にみる多層構造 - 」『縄文時代』第18号
- 阿部芳郎 2012 「土版の出現と関東東部の晩期社会」『土偶と縄文社会』雄山閣
- 上野修一 他 2011 『第101回 企画展 土偶の世界 - 縄文人のこころ - 』栃木県立博物館
- 江見水蔭 1909 『地中の秘密』博文館
- 大野 雲外 1907 「下総国海上郡余山貝塚発見土偶」『東京人類学会雑誌』第23巻 第259号
- 千葉県 2004 「土偶・土版とその他の土製品」『千葉県の歴史 資料編 考古4 (遺跡・遺構・遺物)』
- 坪井 正五郎 1908 「下総余山発見の有髯土偶」『東京人類学会雑誌』第23巻 第262号
- 西村正衛 1984 「千葉県佐原市大倉南貝塚 - 縄文後期文化の研究 - 」『石器時代における利根川下流域の研究 - 貝塚を中心として - 』
- 吉岡卓真 2012 「椎塚貝塚における山形土偶の多様性」『共同研究成果報告書6』大阪歴史博物館